農林技術 研究所だより

最新研究紹介

マーガレット新品種‘シェリエメール’と近縁属植物を用いた品種育成

静岡県農林技術研究所
伊豆農業研究センター
生育・加工技術科
主任研究員
勝岡弘幸

1 はじめに

マーガレット（Argyranthemum frutescens L.）は、カナリア諸島原産のキク科の多年草です。伊豆地域では、温暖な気候を活かし、古くから切り花用マーガレットの栽培が盛んで、地域の特産品目となっています。2000年以降には、鉢物用の栽培が増加し、沼津市、三島市を中心とした県東部地域で鉢物マーガレットの産地が形成されました。

伊豆農業研究センターでは、産地を支援するため、マーガレットの品種育成を進めており、これまでに切り花用13品種、鉢物用26品種を育成しています。今回は、最新品種である、桃色の花色で丁字咲きの‘シェリエメール’（図1）と、現在取り組んでいるマーガレットの近縁属植物を用いた品種育成について紹介します。

図1 ‘シェリエメール’の草姿

2 鉢物用マーガレット‘シェリエメール’の育成

(1)育成のねらい

鉢物マーガレットは、鉢物に向くわい性の草姿で、花色や花形に特徴のある品種が求められます。また、産地では、近年、夏季の高温による生育不良や、開花遅延、花弁の着色不良といった品質の低下が問題となっていることから、これらの問題を克服可能な、高温条件下でも開花が早く、花色の安定している品種が求められています。

(2)育成経過

これらの特性を持った品種の育成を目的に、2012年に130組合せにおよぶ交配を行って得られた5392個体の中から選抜を重ねて育成されたのが‘シェリエメール’です。

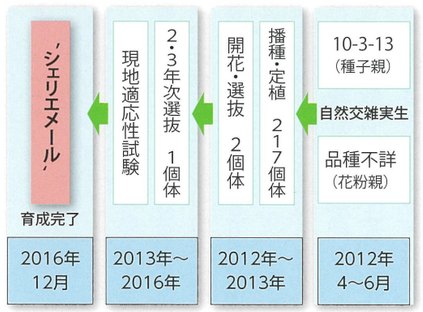

図2 ‘シェリエメール’の育成経過

具体的な育成経過を図2に示しました。2012年に行った130の交配組合せのうち、育成系統「10-3-13」を用いて自然に交雑を行った組合せから、217の個体を得ました。これらの中から、花色と花型が美しく、生育の良い2個体を優良個体として2013年に一次選抜しました。選抜した2個体は、2013年以降、挿し芽により増殖し、伊豆農業研究センター内のほ場で、生育や開花の特性調査と選抜を重ね、目的の形質を保持しているか、生産者のほ場で適応性を調査しました。その結果、‘シェリエメール’は、わい性の草姿で、高温期の作型でも問題なく開花し、発色も安定していることから、鉢物用品種としての有望性が認められました。

また、栽培面だけでなく、販売していく上で重要となる市場性を把握するため、バイヤーが集まる展示会で商品性に関する聞き取りを行いました。その結果、やわらかい桃色の花色や、丸みを帯びた花弁の形から、母の日用のギフトとして利用を希望する声があり、フランス語で「親愛なる母へ」を意味する「シェリエメール」と命名し、品種登録出願しました。

3 ‘シェリエメール’の特性

‘シェリエメール’は、舌状花弁（花序の外側にある花弁）と管状花（花序の中心部分）が桃色の丁字咲き品種です。丁字咲きとは、管状花が咲き進むごとに伸長し、花の中心部分がふっくらと盛り上がる花型を指します（図3）。花形の変化を楽しめるだけでなく、花粉が管状花の内側に留まることで、鑑賞上問題となる花粉による汚れが目立たないといったメリットがあります。

開花は、極早生性の‘サンデーリップル’に比べると遅いものの、開花遅延が起きやすい高温期の作型でも、秋から出荷することができます（表1）。このため、他産地の出荷が本格化する前に一足早く出荷することで、有利に販売することが可能となります。

図3 ‘シェリエメール’の花型

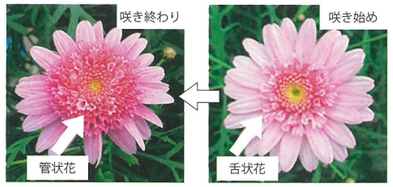

表1 現地における‘シェリエメール’の特性

品種名	開花時期	花色	花型	花径	草丈
シェリエメール	9月下旬	桃	丁字	中	中
サンデーリップル3)	9月中旬	白	一重	小	低
キューティーマイス3)	10月中旬	桃	丁字	小	中

1) 6月中旬挿し芽、7上旬鉢上げ、7月中旬摘心。
2) 花径、草丈は「在来白」を基準に特性を記載
3) 対照品種

4 ‘シェリエメール’の生産・販売状況

‘シェリエメール’は、静岡県と種苗許諾契約を結んだ生産者によって、2018年から出荷が始まっています。当初の育種目標のとおり、高温期でも安定して栽培が可能で、10月から翌年5月まで、県内はもとより、京浜地域、東海地域を中心に、全国へ出荷されています。そして、「シェリエメール（フランス語で親愛なる母への意味）」の名前の通り、母の日用にギフトとしても販売されました（図4）。また、少量ですが、国内だけでなく香港へも輸出され始めています。

図4 母の日向け販売用の見本鉢

5 近縁属植物を使ったマーガレットの品種改良

マーガレットは、可憐な花が魅力的な園芸上重要な植物ですが、品種改良を行う上で、遺伝的な多様性が小さいことが問題となっています。

マーガレットの含まれるArgyranthemum属には、原種が23～24種あるとされていますが、いずれの原種も、夏季に冷涼で冬季に温暖なカナリア諸島、マデイラ諸島に自生地が限られることから、高温や低温に比較的弱く、マーガレットの栽培適温が狭い要因となっています。また、原種のほとんどが白花種であり、桃花種、黄花種は、それぞれ淡い色を持つものが1～2種のみしかないなど、鑑賞上重要な花色や香りなどの形質について、属内の変異が小さく、育種への利用には限界があります。

このような場合には、近縁属植物を用いることが二つの解決法になると考えられます。農林技術研究所では、マーガレットのさらなる花色の拡充と、耐寒性や耐暑性強化、香りの付与を目的に、数種の近縁属植物との交配を試み、世界で静岡県にしかない新しい雑種を育成しています（図7）。得られた新しい雑種植物は、現在、特性の調査を行っており、目的の形質がマーガレットに導入できているかを確認しているところです。

6 おわりに

マーガレットの品種育成は現在も継続しており、来年度には、新たに3品種を市場に投入できるよう準備を進めているところです。また、図7で紹介した新しい雑種植物は、まだ育成段階で、品種化には数年の時間がかかることが予想されますが、今後も品種育成を通じて、新たな魅力が加わったマーガレットが普及し、産地の振興と消費の拡大に寄与してまいります。

図7 世界で静岡県にしかない新しいマーガレット雑種

賀茂郡東伊豆町稲取3012
静岡県農林技術研究所
伊豆農業研究センター
生育・加工技術科
agriizu@pref.shizuoka.lg.jp